

## なぞの魔術院を 捜せ！

by KAZUTARO

アフリカや東南アジアの奥地には魔術師がいるという噂は耳にしたことがある。でも、どうせTV番組のでっち上げさ、そう思っていた。

そう、ここ近鉄内部駅前の看板をこの目で見るとまでは信じることができなかった。だが、看板には確かにこう書いてあったのだ。

『国民長寿魔術院』。

噂に聞いていた呪術医療が、この日本で行われている。文明の進んだこの日本で魔術師が地域住民に対して呪術医療を施しているなんて……。

我々は怖いもの見たさで、駅前の道を進んで行った。すぐに舗装は途絶え、登り坂になるとともに道は細く心細くなっていく。いつしか道はうっそうとした森の中の小径となる。さらに進むと、足元は藪に覆われ、視界は蔭でおおわれ、全く視界がきかない。もう戻りたくても戻れない。我々が不安におののき始めたとき、目の前にあやしげな一軒家が現れた。

「あ、あれにちがいないぞ。」

「おお、看板も出ているぞ。」

駅から歩くこと5時間、うっそうとした森の中で、ついに謎の魔術院を見つけた。

「どうする、中に入ってみるか？」

「や、やだよ。変に治療されて

死にたくはない。」

「しかし、慢性の腰痛や鼻炎が

治るかもしれんぞ。」

「う～ん、しかしなあ。」

「この看板に書いてある〔温熱〕って効きそうだなあ。」

「オーラパワーかなんかだろうか。」

「〔可視光線〕ってのも良さそうだ」「ただの光とはひと味違う感じだね」「〔電気〕てのは、やっぱ天の

いかづちを使うんだろうな。」

「しびれが腰に効きそうだなあ。」

「入ってみるか。」

ガラガラガラ

「ごめんくださ～い」

「……………（無言）…」

「あ、あかんわ。日曜日や。」

ほとんどフィクションです。